富山浄禅寺蔵の二種の一遍及び一遍真教の近世掛幅絵伝

渡邊昭五

昭和五十年（一九七五）発行の、絵巻物である聖戒編の歓喜光寺本『一遍聖絵』に付載された望月信成の解説[注1]には、一遍の伝記絵巻の系統図の後に、次のように説明されている。

（一遍の伝記絵は）絵巻物形式によらず、幅仕立としたものもたくさんある。なかんづく山形県長泉寺には優秀作品を所蔵しているが、この幅仕立本は絵巻物に基づいて、詞書を全部省き、絵の部分のみを大きな画面に数段に描き分けたもので、一幅乃至数幅にまとめたものである。

として、時宗開祖の一遍の絵伝は中世の絵巻物ばかりではなく（絵巻物も現存作品は模写本を含めて数点にすぎぬが…）掛幅絵によるものは、全国にたくさん流布しているような言質を記している。しかしその掛幅絵の存在や所在や数の表現が、まことに曖昧である。〈たくさんある〉、〈一幅乃至数幅〉とか、〈山形県長泉寺〉と漠たる表現で都市名の所在も記されていない。おそらく望月自身が仄聞によって耳にしたものを記したもの、としか推測できない。この望月の幅仕立の多いとした報告に対して、私は『宗祖高僧絵伝集』[注2]において次のように述べた。

ここ二十年ほど、あちこちを渉猟した折に、注意してきたが、一遍の掛幅絵というのは管見には見聞できないでいる。一遍の掛幅絵は無い…と断ずるべきではないか、と私は思っている。

と、記した。その理由としては、時宗（衆）草創期は、草堂を持っていなかった、いわゆる遊行衆の集団であって、一遍遊行の文永十一年（一二七四）から七条道場創始（一三〇一）や真教の金光院独住（一三〇三）までは、掛幅で絵解きをする草堂もなかったし、掛幅などの財産を持って全国を放浪する余裕もなかったはずである。そして、時宗がそれぞれの派の寺院を維持し始めるのは、四世呑海の清浄光院に拠って（一三二五）の藤沢一世誕生以降あたりからで、やはり掛幅絵による宗祖伝記語りと一山一派の宣伝活動が、相呼応しはじめるのは浄土真宗本願寺派治頭の蓮如以降の中世末期ごろからであろう。十四世紀半ば以降から蓮如登場までの時宗全盛時代は、草創期の精神とは全く逆の、専ら武士や公卿の貴顕階級に傾いていて、一遍や真教時代の農民や被差別民からの、その心は離れている。その間に庶民唱導のための絵解きが行われていたとは思えない。それは掛幅絵解きが、多勢を草堂に集めて、無学文盲の人を中心に対象としての一山一派の宣伝活動だからであって、文字の読める小人数の上層クラスを対象としたものではないからである。中世期に一遍絵伝の絵解きは行われていなかった、と考える方が妥当のようである。

従って、私は今でも中世期の一遍掛幅絵伝は無かった…と考えている。近世初期の存在も疑うべきであろう。

最近の平成七年（一九九五）に出版された『時衆の美術と文芸』に

おいて(注3)、列祖仏像や肖像や絵巻模写本とともに文化十三年（一八一二）の識語を記す四幅の遊行上人縁起絵が、わずか一点ではあるが、富山市浄禅寺（富山市梅沢町三丁目）に伝存していることが報告された。

一遍掛幅絵伝が無いとした上述の私の見解(注2)に対しての、渡邊信和の批判もあったこと(注4)で、たとえその絵伝が私の考えていた一山一派の宣伝用の中世～近世初期の範疇からはずれかかった近世末期のものであろうとも、早く調査に赴かなければならぬと考えて、所在を知ってから早くも五年の歳月が経過していた。

※

平成十年（一九九八）八月廿五、六日及び同年十一月廿五、六日の二度にわたって、富山市の浄禅寺に赴き、二種の掛幅絵伝の撮影を許された。調査者は私の他に、土屋順子（大妻女子大学非常勤講師）と合瀬純華（同博士課程在学中）の二名で、写真撮影は主として土屋順子が行なった。

浄禅寺は富山県に在る時宗の唯一の寺院で、そのパンフレット「時宗浄禅寺由来」には、永仁二年（一二九四）に二世遊行上人真教他阿が北陸遊行の折に帰依した恵顕（えぎ）の開基に拠るもので、越中国新川郡新川権現の隣に創立した弘長三年（一二六三）の一寺を、慶長期（一五九六～）に前田利長が富山城に移った際に城下に移転した、と記す。永仁二年の真教北陸遊行の記事を真実とすれば、正安三年（一三〇一）に定朝の邸跡に七条道場ができる七年前、当麻無量光寺を創して独住する嘉元二年（一三〇四）の十年前に相当し、二世真教の遊行の最晩年ということになる（真教入寂一三一九年）。

二種の掛幅絵は、その一Ⓐが天保十五年（一八四四）死亡の施主の裏書がある一遍と真教の草創二代の伝記を描いた「遊行上人縁起掛幅絵」が四幅で、絹本着彩の手書きである（写真九九～一〇二ページ）。その二Ⓑが、清浄光寺蔵版の本版刷りの二幅で「一遍上人絵伝掛幅絵」の同じ紙本着彩になっている（一〇三～一〇四ページ）。注目すべきは、Ⓑの方で江戸末期ごろに木版刷りのこの種の絵伝が本山より時宗地方寺院に数多く配布されたことが、容易に推察される。本山の遊行寺には同じ構図の白描の木版掛幅絵伝が存在していることが、土屋順子の後日の調査で判明した。その点、江戸末に中世期の全盛時代を省みて時宗のPR活動による一山一派の建てなおしを意図した運動なども推察されるところである。なお、上述〈山形県長泉寺〉の〈幅仕立〉と論説されたものも、鶴岡市に時宗の寺のあることがわかって、これもまた土屋順子に依って同寺に存在せず、他寺にあったとすれば、恐らく近世末期のものであろうことが推測される。

カラー写真の詳しい内容の分析と検討もⒶについては合瀬純華が、Ⓑについては土屋順子が、その調査報告を兼ねた論文として「芸能文化史」十七号（平11発行予定）に収載する。併せて、この掛幅の発見において触発された宗祖高僧絵伝史の前論文(注2)の補訂を兼ねた新論文の「宗僧掛幅絵伝絵解き史の諸論」も、「大妻国文」30号(平11)に掛幅絵伝史の概括論として収載する。併せ参照していたゞければ光栄である。

（注1）望月信成「一遍上人絵伝について」（日本絵巻物全集11『一遍聖絵』・昭50・角川書店）

（注2）渡辺昭五「宗祖高僧絵伝の絵解き」（『宗祖高僧絵伝集』所収・平8・三弥井書店）

（注3）山梨美術館『時衆の美術と文芸――遊行聖の世界――』（平7・東京美術）

（注4）渡邊信和「書評－宗祖高祖絵伝集」（絵解き研究13・平9）
渡辺昭五
「渡邊信和書評宗祖高祖絵伝集に対する反論と弁解」（伝承文学研究47・平10）

第一図：Ⓐの一幅目、下段右端の①御随夢より最上段左端の⑬
甚目寺までの齣を描く。

第二図：Ⓐの一幅目より続いての二幅目。下段右端の⑭念仏法門より最上段左端の㉕摂州兵庫真光寺までを描く。以上で前半の一遍上人伝が終り、三幅目（次ページ）から後半は真教上人伝となる。

第三図：Ⓐの二幅目に続く三幅目で。真教伝となる。下段右端の㉖丹生山より最上段左端の㊲越中放生津南条九郎までの説話の齣を描く。

第四図：Ⓐの四幅目、真教上人伝の後半で、下段右端の㊳越後国池の某より最上段左端の㊷当麻までの説話の齣を描く。

第五図：Ⓑの一幅目。最上段右側の①一遍生家に始まって、
最下段左端の㉔三島社奉幣までの説話の齣を描く。

第六図：Ⓑの二幅目。一幅目の説話画に続いて最上段右端の㉕鯵坂入道入水より最下段左端の㊿一遍入滅から㊿一遍墓所までの齣を描く。

第七図：Ⓑの一幅目、最上段右端の①一遍生家から一遍の家である河野家略系図を挟んで、左端の②一遍鎮西への出立と華台上人訪問の三齣を描いたもの。

第八図：Ⓑの一幅目の四段目。⑩熊野権現との出会いの一齣を描いたもの。

第九図：Ⓑの一幅目、最下段右端。㉑白河の関を通過して河野通信の塚を詣でる一遍。

第十一図：Ⓑの二幅目の最上段の右から二番目。㉖片瀬の館にて対面する一遍と生阿弥陀仏。

第十図：Ⓑの二幅目の五段目の中央。㊷厳島社頭の一遍一行。